白梅学園大学・短期大学紀要　**42**：13～28（2006）

日本の若者におけるピアッシング行為に関する一考察

――自傷行為との関連性を中心に――

金　愛慶*

This study examined the each image of piercing and self-mutilation, and the relationship between piercing and self-mutilation in the Japanese youth. The survey conducted to junior college students (female=256, male=28, unknown=1) about participant's actual piercing conditions, image of piercing and self-mutilation, and the degree of regarding piercing behavior as a self-mutilation (female=256, male=28, unknown=1). Four factors are reduced as the image of piercing behavior ; internal uplift (Fac.1), feminine (Fac.2), negative appearance (Fac.3), ways of fashions (Fac.4). Two factors are reduced as the image of self-mutilation ; means of existence (Fac.1), impossibility in sympathy (Fac.2). High piercing group shows more high scores in feminine and ways of fashions image, and more low scores in the negative appearance image. On the other hand, moderate piercing group shows converse scores in these factors. These results suggest that there are some qualitative differences in the image of piercing that having influence on repeating of piercing behavior between two groups. In the degree of regarding piercing behavior as a self-mutilation, there is no significant difference between two groups. However, high piercing group shows more low scores in impossibility in sympathy (Fac.2) than moderate piercing group. This result suggests that high piercing group has tendency to identify themselves with self-mutilator.
Keywords : *piercing behavior, self-mutilation, image*

目　的

1970年代からアメリカでは，眼球摘出，四肢の切断，去勢といった精神障害の患者による重篤な自傷行為（Major Self-mutilation）や知的障害者に多く見られる常同的自傷行為（stereotypic Self-mutilation）とは異なる，表面的・軽度の自傷行為（superficial／moderate Self-mutilation）が注目され，多くの研究がなされてきた。表面的・軽度の自傷行為とは，刃物などで皮膚の表面を切る，皮膚を引っ掻く，タバコなどの火を皮膚に押しつける，針で皮膚をさす，または穴を開けるなどといった自殺を目的とせずに繰り返される自

*短期大学心理学科

傷行為を意味する（Favazza & Rosenthal, 1993 ; Simeon & Favazza, 2001）。

日本でも1978年に西園・安岡によって，「手首自傷症候群」の症例の検討から，未婚の女性に多いことや，手首自傷の背景には母性性の剥奪や見捨てられ不安などの心理的葛藤があることなどが指摘された。そして，柏田（1988）は手首自傷患者の23症例を検討し，手首自傷を構成する動機として，次の3つの要因を取り上げた。前駆的な心理状態として抑うつ，いらいら，不安，離人感があり，Cuttingがこの不快感を一掃するのに役立つ①「開放的要因」，患者が傷ついている自分の身体を「移行対象」として扱い，同時に「手首の人格化」がなされた結果である②「自己陶酔的要因」，Cutting行為を現実の他者の操作やアピールのために行う③「他者操作的要因」がそれであり，この3つの要因が手首自傷の動機となっているとした。これらの先行文献を総合すると，手首自傷者にとって自傷行為は，生きていく上では必要な行為であり，彼等なりの適応の試みという実存的な意味が込められているとも言えよう。また，医療機関や大学の保健センター，学生相談室などにおける自傷の事例はこの数年間で年々増加し，インターネット上では自傷者のホームページが数多く掲載されているなど，若者の間では自傷行為が風俗化した傾向さえ見受けられる（Favazza, 1998 ; 小田，2000）。

一方，リストカット（wrist cut）に代表される自傷行為が社会的関心を集めるようになる更に数年前から若者の間ではピアッシング（piercing）が流行し（村澤，2002），自ら安全ピンで穴を開けたり，飾り用のピアスの代わりに安全ピンをつけていたりする若者を多く見かけるようになった。また，開穴部位も耳だけでなく，鼻・口・へそ・首筋など様々な部位にピアスをしている人も多くなっている（苅田，2002）。このようなピアッシング行為には単なる装飾的意味に留まらず，外部に対する反抗心や護符的意味合いが込められている印象を受ける。自己と被服行動との関連性を検討した神山（1996）は，人間の装いには，①他者に何かを伝える「情報伝達機能」，②自分自身を確認し，強め，変えるという「自己確認・強化・変容機能」，③他者とのやり取りを規定する「社会的相互作用の促進・抑制機能」があるとし，自己の防衛や高揚の働きをするとした。ピアッシング行為も被服行動の一環として考えると，これと同様の機能があることが予想される。

また，身体に穴を開けるというピアッシング行為には痛みが伴っており，一部のピアッシング行為は自傷行為（Feldman, 1988 ; Favazza, 1989 ; Favazza & Rosenthal, 1993 ; Simon & Favazza, 2001）とも見なされているが，近年の若者の中では複数のピアス穴を開けたり，ピアス穴を広げる行為なども流行っている。

そこで本研究では，今の若者は「ピアッシング行為」とリストカットなどの「自傷行為」についてどのようなイメージをもっているかを調べると共に，過剰なピアッシング行為と自傷との関連性について検討した。

方　法

対象者　短期大学の1，2年生253名，同年代の社会人32名の計285名（男性28名・女性256名・無記入1名）を対象に調査を行った。平均年齢は19.38歳（*SD*＝1.23）であった。

調査期間　2004年11月から12月にかけて実施した。短期大学生には集団で，同年代の社会人には個別に調査を行った。

質問紙　「ピアッシング実態を問うアンケート」および「ピアス・イメージ尺度」は，ピアッシング経験者5名と未経験者5名へのインタヴューによって質問項目を構成した。「自傷行為イメージ尺度」は，自傷行為に関する先行文献及び前述した10名のインタヴューによって構成した。

1. 独自に作成したピアッシング実態を問うアンケート（9項目）：
   1) ピアッシング経験の有無（2件法）
   2) 現在のピアスの開穴数
   3) 今まで開けた延べ開穴数（穴がふさがったものも含む）
   4) 開穴方法：「①自分で，安全ピンで，②自分で，ピアッサーで，③他人に安全ピンで，④他人にピアッサーで，⑤ピアス屋で，⑥病院で，⑦その他（自由記述）」の選択肢から最も多く用いた順に複数回答可
   5) 開穴部位：「①耳たぶ，②鼻，③眉，④口，⑤舌，⑥へそ，⑦その他（自由記述）」の選択肢から最も多く開けている部位の順に複数回等可
   6) 拡張（ピアス穴を広げる行為）の経験の有無（2件法）
   7) 開穴の理由：「①かっこいいから，②記念に，③友達が開けたから，④憧れ，⑤反抗心，⑥おしゃれ，⑦なんとなく，⑧その他（自由記述）」の選択肢から最も当てはまるものを一つ選択
   8) ピアスへの興味の有無（2件法：ピアッシング未経験者用の質問項目）
   9) ピアスを開けない理由：「①怖い，②痛そう，③面倒くさい，④金属アレルギー，⑤禁止されている，⑥興味がない，⑦お金がない，⑧その他（自由記述）」の選択肢から最も当てはまるものを一つ選択
2. 独自で作成したピアス・イメージ尺度（23項目，「よく当てはまる」から「全く当てはまらない」の5件法）
3. 独自で作成した自傷行為イメージ尺度（24項目，「よく当てはまる」から「全く当てはまらない」の5件法）
4. ピアッシングを自傷行為だと感じる程度　（1項目，「そう感じる」から「そう感じない」の5件法）

結　果

以下のすべての分析において，欠損値は分析ごとに除外している。

1. 対象者のピアッシング実態

本調査の対象者の内，ピアッシング経験者は166名（58.2%），未経験者は119名（41.8%）であった。

1）ピアッシング経験者におけるピアッシング実態

今まで開けたピアスの延べ開穴数に関する質問に，2個（41名，24.7%）と答えた人が最も多く，4個以下の人が全体の55.5%であった（表1参照）。

また，現在開いているホール数に関する項目では，2個という回答が最も多く（49名，29.7%），開穴数は1.91（*SD*=2.51）個であった（表2参照）。

表1．ピアッシング経験者の今までの延べ開穴数（個）

延べ開穴数	人数	%	累積%
1	4	2.4	2.4
2	41	24.7	27.1
3	31	18.7	45.8
4	16	9.7	55.5
5	21	12.7	68.2
6	10	6.0	74.2
7	15	9.0	83.2
8	6	3.6	86.8
9	6	3.6	90.4
10	5	3.0	93.4
11	3	1.8	95.2
12	3	1.8	97.0
13	1	0.6	97.6
14	1	0.6	98.2
19	1	0.6	98.8
21	1	0.6	99.4
25	1	0.6	100.0

(n=166)

表2．ピアッシング経験者の現在の開穴数（個）

開穴数	人数	%	累積%
0	17	10.3	10.3
1	8	4.8	15.2
2	49	29.7	44.8
3	37	22.4	67.3
4	15	9.1	76.4
5	14	8.5	84.8
6	11	6.7	91.5
7	5	3	94.5
8	1	0.6	95.2
9	2	1.2	96.4
10	3	1.8	98.2
12	1	0.6	98.8
14	2	1.2	100.0

(n=165)

次に，ピアスの開穴方法に関する質問においては，「他人にピアッサーで」が最も多く（55人，33.5%）で，「自分で，ピアッサーで」（47人，28.7%），「自分で，安全ピンなどで」（29人，17.7%），「病院で」（27人，16.5%）の順となった。自分で開穴した人は，76人で全体の46.4%をも占めていた（表3参照）。

ピアッシングの部位に関する質問については，耳のみが88.0%で（146人）であり，それ以外の部位にも開けていると答えたのは12.0%（20人）であった（表4参照）。

表3．ピアッシングの方法別の結果

方法	人数	%
他人にピアッサーで	55	33.5
自分でピアッサーで	47	28.7
自分で安全ピンなどで	29	17.7
病院で	27	16.5
ピアス屋で	4	2.4
他人に安全ピンなどで	1	0.6
その他	1	0.6

(n=164)

表4．ピアッシング経験者のピアッシング場所

ピアッシング場所	人数	%
耳のみ	146	88
それ以外の部位	20	12

(n=166)

また，ピアスの穴を広げる拡張行為についての質問に対しては，27.9%の人が拡張経験をしていた（表5参照）。

表 5.　ピアッシング経験者の拡張経験

拡張経験	人数	%
あり	46	27.9
なし	119	72.1

(n=165)

ピアッシングの理由に関する質問に対しては，「おしゃれ」を挙げた人が54.3%（89人）で最も多く，次に「なんとなく」（34人，20.7%）の回答が多かった（表6参照）。「その他」に回答した人の具体的な理由としては，「自傷行為として」，「決意表明」，「自分への挑戦」，「ストレス発散」，「何かを変えたかったから」などの自由記述がなされていた（表7参照）。

表6．ピアッシングの理由

ピアッシング理由	人数	%
おしゃれ	89	54.3
なんとなく	34	20.7
かっこいい	10	6.1
憧れ	9	5.5
その他	9	5.5
記念に	5	3.0
友達が開けたから	4	2.4
反抗心	4	2.4

(n=164)

表7．ピアッシング理由のその他の自由記述内容

ピアッシング理由	人数
何かを変えたかったから	1
決意表明	1
仕方なく	1
自傷行為として	1
自分への挑戦	1
面白いと思ったから	1
ストレス発散	1
無記入	2

(n=9)

2) ピアッシング未経験者の結果

ピアッシング経験が無かった119人のうち無記入の1名を除くと，ピアスに興味がある人は66名（55.9%），興味が無い人は52名（44.1%）であり，半数以上が興味を持っていると答えた（表8参照）。

表 8. ピアッシングへの興味の有無

興味	人数	%
あり	66	55.9
なし	52	44.1

(n=118)

次に，未経験者のピアッシングをしない理由に関する質問では，「痛そう」という理由を挙げた人（43名，36.4%）が最も多く，「興味が無い」（22名，18.6%），「怖い」（15名，12.7%）の順となり，約半数（49.2%）が痛みと恐怖感からピアッシングをしていないという結果であった（表9参照）。また，「その他」に回答した人の具体的な理由としては，「献血が出来ない」，「親からもらった身体を傷つけたくない」，「悪いイメージ」，「周りの反応」，「体に傷つけたくない」など，否定的なイメージが挙げられていた（表10参照）。

表9. ピアッシングをしない理由

ピアッシングしない理由	人数	%
怖い	15	12.7
痛そう	43	36.4
面倒臭い	9	7.6
アレルギー	10	8.5
禁止されている	7	5.9
興味が無い	22	18.6
お金が無い	3	2.5
その他	9	7.6

(n=118)

表10. ピアッシングしない「その他」の自由記述内容

ピアッシング理由	人数
親からもらった身体を傷つけたくない	2
勢いが無い	2
悪いイメージがあるから	1
周りの反応が気になるから	1
ホール完成まで我慢出来ないだろうから	1
献血が出来ない	1
就活などで忙しくて	1

(n=9)

2. ピアス・イメージ尺度の因子分析の結果

独自に作成したピアス・イメージ尺度の項目の分類を行うために，全調査対象者の得点をもって因子分析（主成分法，Varimax回転）を行った。その結果，次の4つの因子（スクリー法）が抽出された。これを表11に示す。

第1因子では，ピアスを開けることによって，「自信がつくと思う」，「新しい自分になれる気がする」，「精神的な高まりが得られる」，「おしゃれに見える」，「大人になれそう

な気がする」，「運勢が変わるなど，神秘的な力がある」といった内面的変化や精神的な高揚が得られる肯定的変化を意味する項目の因子負荷量が高いことから，「Fac.1内面的高揚イメージ」と名づけた。

第2因子では，「男性のピアスは，女性に比べておしゃれの意味合いが薄い」，「男性のピアスは女々しいと思う」，「ピアスは男女共通で楽しめるものだと思う（負の因子負荷量）」などの項目の因子負荷量が高いことから「Fac.2女性的イメージ」と名づけた。

第3因子では，「ピアスは不衛生だと思う」，「ピアスには，ふさわしくない場（面接など）がある」，「ピアスは外部への反抗心など，自己表現の一部である」，「親にもらった身体を傷つけるなんて申し訳ないと思う」などの項目の因子負荷量が高いことから，「Fac.3否定的外見イメージ」と名づけた。

第4因子では，「ピアスはつけている時よりも，開ける時の方が楽しい（負の因子負荷量）」，「ピアスはファッションの一部に過ぎないと思う」「過度なピアスをしている人には近寄りがたい印象を受ける」，「ピアスは流行の一つである」，などの因子負荷量が高いことから「Fac.4ファッション道具イメージ」と名づけた。

表11．ピアス・イメージの4因子解の結果

項　　目	Fac. 1	Fac. 2	Fac. 3	Fac. 4
9) ピアスを開けると自信がつく。	.81	.05	.15	−.05
13) ピアスを開けると新しい自分になれる気がする。	.75	.11	.13	.09
4) ピアスを開けると，精神的な高まりが得られる。	.65	−.04	.04	−.34
10) ピアスをしている人は，おしゃれに見える。	.55	−.02	.03	.44
17) ピアスを開けると，大人になれそうな気がする。	.55	.35	.11	.31
7) ピアスをつけているかつけていないかで，その人のイメージが変わる。	.50	.09	.35	.16
22) ピアスは，運勢が変わるなど，神秘的な力がある。	.47	.13	−.08	−.04
16) 男性のピアスは，女性に比べておしゃれの意味合いが薄い。	.19	.72	.15	.07
12) 男性のピアスは女々しいと思う。	.28	.67	−.05	.04
3) ピアスは男女共通で楽しめるものである。	.13	−.65	.09	.25
15) ボディ・ピアスはファッションの域を越えていると思う。	.06	.63	.44	.10
20) ピアスは不衛生だと思う。	.05	.23	.71	−.13
19) ピアスには，ふさわしくない場（面接など）がある。	.03	−.16	.59	.22
8) ピアスは外部への反抗心など，自己表現の一部である。	.36	−.06	.55	−.24
14) 親にもらった身体を傷つけるなんて親に申し訳ないと思う。	−.01	.41	.55	−.02
11) ピアスは，つけている時よりも，開ける時の方が楽しい。	.32	−.14	.24	−.61
1) ピアスはファッションの一部に過ぎないと思う。	−.08	−.15	−.10	.55
21) 過度なピアスをしている人には近寄りがたい印象を受ける。	.08	.26	.28	.54
6) ピアスは流行の一つである。	.23	−.08	.07	.50
固有値	4.11	2.05	1.86	1.37
累積説明率（%）	21.61	32.37	42.14	49.34

主成分法（スクリー法、Varimax 回転）

3.「ピアス・イメージ」におけるピアス開穴数による3群間の差の検討

現在のピアス開穴数の平均値（1.91）と標準偏差（2.51）をもとに，調査対象者を「未経験群」，現在の開穴数が4個以下を「平均群」，5個以上を「過剰群」の3群に分けた。

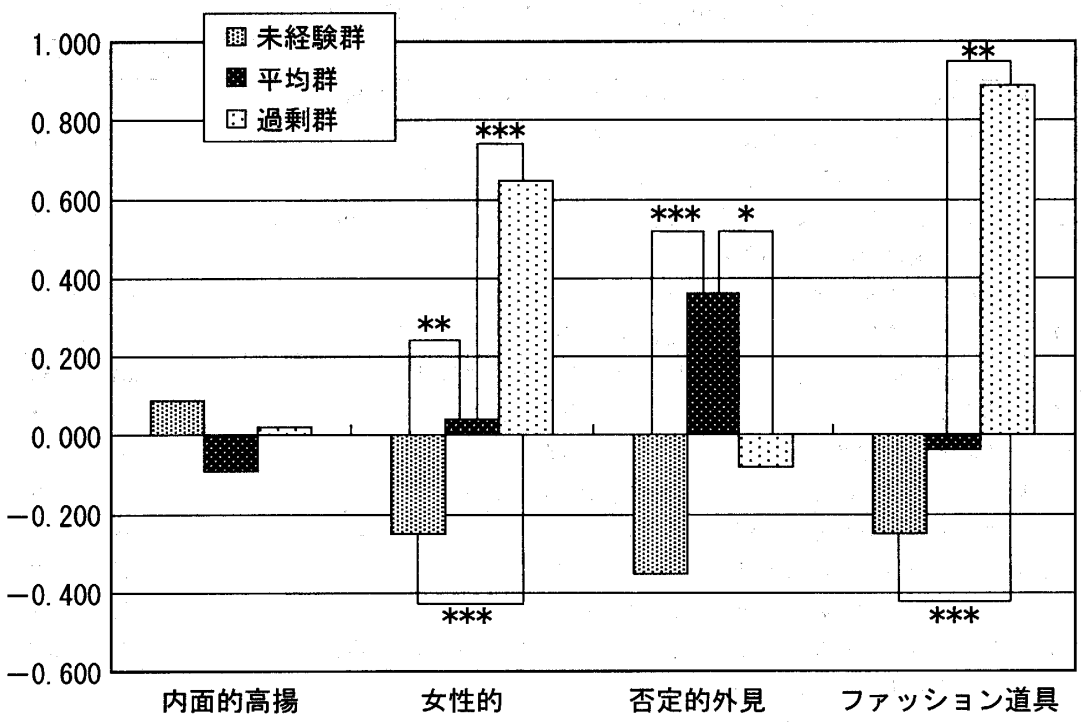
そして，3群間における「ピアス・イメージ」に差があるか否かを検討するために，一元配置の分散分析を行った。その結果，「Fac.2女性的イメージ」（F（2,282）=12.660, p<.001），「Fac.3否定的外見イメージ」（F（2,282）=15.678, p<.001），「Fac.4ファッション道具イメージ」（F（2,282）=22.069, p<.001）の3つの因子において有意差が見られた（表12参照）。

更に多重比較を行った結果，「Fac.2女性的イメージ」では，全ての群の組み合わせにおいて有意差が見られ，過剰群の得点が最も高く，平均群，未経験群の順となった。「Fac.3否定的外見イメージ」では，「未経験群と平均群」の間，「平均群と過剰群」の間で有意差がみられ，いずれにおいても平均群の得点が高かった。「Fac.4ファッション道具」では，「未経験群と過剰群」の間，「平均群と過剰群」の間で有意差が見られ，いずれにおいても過剰群の得点が高かった（図1参照）。

表12.「ピアス・イメージ」における3群間の一元配置の分散分析

	M	*SD*	*F*
Fac. 1　内面的高揚			
未経験群（n=119）	0.090	0.977	
平 均 群（n=127）	−0.090	0.980	1.009 *n.s.*
過 剰 群（n=39）	0.019	1.126	
Fac. 2　女性的			
未経験群（n=119）	−0.253	0.907	
平 均 群（n=127）	0.041	1.025	12.660 ***
過 剰 群（n=39）	0.647	0.907	
Fac. 3　否定的外見			
未経験群（n=119）	−0.352	0.908	
平 均 群（n=127）	0.360	0.969	15.678 ***
過 剰 群（n=39）	−0.082	1.027	
Fac. 4　ファッション道具			
未経験群（n=119）	−0.251	0.791	
平 均 群（n=127）	−0.037	1.003	22.069 ***
過 剰 群（n=39）	0.890	1.090	

注）*n.s.*：no significant,　***：p < .001



注）* : $p < .05$, ** : $p < .01$, *** : $p < .001$

図1. ピアス・イメージにおける3群間の比較

4. 自傷行為イメージ尺度の因子分析の結果

独自に作成した自傷行為イメージ尺度の項目の分類を行うために，全調査対象者の得点をもって因子分析（主成分法，Varimax回転）を行った。その結果，次の2つの因子（スクリー法）が抽出された。これを表13に示す。

第1因子は「リストカットすることによって，ストレス発散が出来ると思う」，「身体を傷つけることによって高揚感が得られると思う」，「リストカットをすることによって自分の存在を確かめることが出来ると思う」などの因子負荷量が高かったことから，「Fac.1実存手段イメージ」と名づけた。

第2因子は，「リストカットしている人は怖いと思う」，「リストカットは弱いものがすることだと思う」，「リストカットをする理由がわからない」などの因子負荷量が高かったことから，「Fac.2非共感」と名づけた。

表13. 自傷行為イメージの2因子解の結果

項　　目	Fac. 1	Fac. 2
14) 身体を傷つけることによって高揚感（気分が高まること）が得られる。	.76	.01
12) リストカットをすることによって，欲求を満たせる。	.74	−.14
8) リストカットすることによって，ストレス発散が出来る。	.73	−.25
3) リストカットをすることによって自分の存在を確かめることが出来る。	.70	−.25
21) 痛みが快感になることがある。	.69	.03
1) 痛みを感じて安心することがある。	.69	−.13
7) 自分の血の流れるところを見ると，生きている実感がする。	.65	−.08
24) 別に死にたくないけど，手首を切るということは理解できる。	.64	−.32
4) 身体を傷つけようとする人を見ても，止めようと思わない。	.54	.13
10) 身体の痛みの方が，心の痛みよりましである。	.43	−.23
16) 周りに迷惑をかけなければ，自傷は本人の勝手である。	.42	.19
22) リストカットをする理由がわからない。	−.14	.73
2) リストカットしている人は怖い。	−.18	.70
13) リストカットは弱いものがすることである。	.13	.67
20) もし，知り合いがリストカットしてると知ったら，その人と距離を置く。	.07	.61
11) リストカットは自分には縁が無い。	−.44	.56
5) 自らを傷つけるのは格好悪い。	−.05	.55
19) リストカットをしても何も変わらない。	−.11	.48
固有値	5.42	2.52
累積説明率（%）	27.00	44.10

主成分法（スクリー法、Varimax回転）

5.「自傷行為イメージ」,「ピアッシングを自傷行為だと感じる程度」におけるピアス開穴方法と開穴数による2要因の分散分析

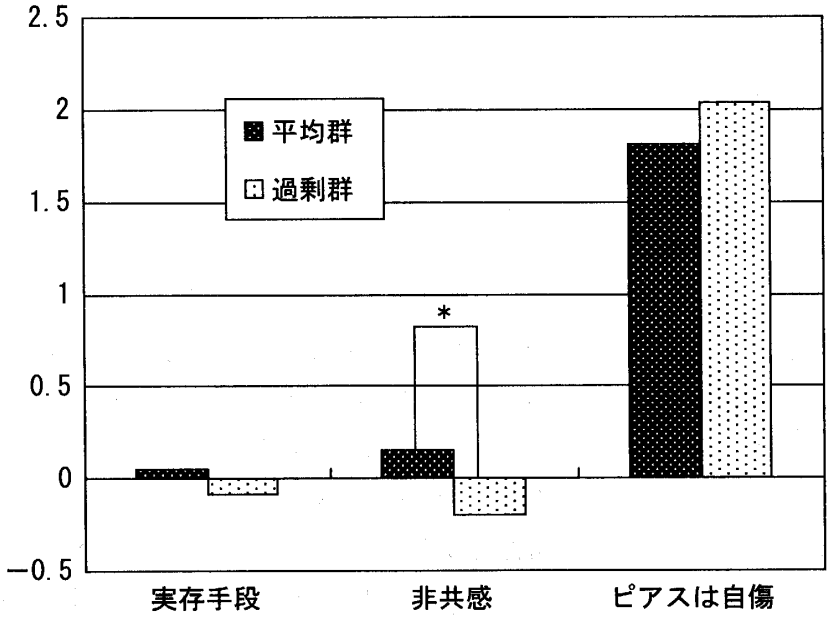
開穴方法（自・他）と自傷との関連性，また開穴数（平均・過剰）と自傷との関連性を検討するために，開穴方法と開穴数を独立変数，「自傷行為イメージ」2因子の因子得点と「ピアッシングを自傷行為だと感じる程度（1項目）」を従属変数とする2要因の分散分析を行った。その結果を表14に示す。

その結果，自傷行為イメージの「Fac.2非共感」で開穴数による主効果が見られ，過剰群が平均群に比べて自傷行為への「非共感」の得点が低く，自傷者への理解の困難さと関わり否定，自傷行為と自分との無縁さ，自傷行為の無意味さなどを否定する結果であった（図2参照）。しかし，そのほかの得点における主効果及び交互作用はみられなかった。

表14. 「自傷行為イメージ」，「ピアッシングを自傷行為だと感じる程度」におけるピアス開穴方法と開穴数による2要因の分散分析

	平均平方和	*F*	
Fac1.実存手段イメージ			
開穴方法	0.292	0.301	***n.s.***
開穴数	0.262	0.270	***n.s.***
開穴方法×開穴数	0.370	0.381	***n.s.***
Fac2.非共感			
開穴方法	0.481	0.483	***n.s.***
開穴数	3.915	3.932	*
開穴方法×開穴数	0.051	0.051	***n.s.***
ピアッシングを自傷行為だと感じる程度			
開穴方法	0.282	0.262	***n.s.***
開穴数	1.337	1.242	***n.s.***
開穴方法×開穴数	0.547	0.508	***n.s.***

注） n.s. : no significant,　* : $p < .05$



注） * : $p < .05$

図2. 「自傷行為イメージ」と「ピアッシングを自傷と思う程度」における2群間の差

考　察

1. 若者のピアッシング傾向について

本調査の58.2%の対象者がピアッシングを経験しており，現在開いているホール数では3個以上の人が55.2%も占めていたこと，そしてピアッシング未経験者の中にも55.9%人がピアスに興味があると回答したことから，ピアスは若者に広く受け入れられていることが分かった。

そして，ピアッサーや安全ピンなどによって自分で穴を開けている人が46.4%，耳以外の部位にもピアスをしている人が12.0%，ピアスの穴を広げる拡張経験をしている人が27.9%もいた。これらの結果を総合すると，今の若者にとってピアッシング行為は，非常に手軽で身近なものになっていることのほか，その方法も多様化していることが特徴的であると言える。

ピアッシングの理由については，「おしゃれ」という回答が54.3%と最も多かったものの，「なんとなく」，「記念に」，「友達が開けたから」，「反抗心」，「その他」の装飾以外の理由を挙げている人も34.0%を占めており，一部の若者においてはピアッシング行為に装飾以外の目的や意味があることが示された。

2. ピアスに関するイメージについて

ピアス・イメージ尺度の因子分析結果によると，第1因子として，「内面的高揚イメージ」が抽出された。ピアスは外見的イメージの変化をもたらすファッション道具であるというイメージ（「Fac4.ファッション道具」）よりも，自己の内面的な肯定的変化や精神的高揚が得られる手段といった内的な自己の変化のイメージがより全面に出ていることは大変興味深い知見である。女子大生のピアスに対する意識と人生観を調べた金子・桜井（2004）によると，ピアス群と非ピアス群の両方を合わせると「運命が変わる（25.4%）」，「運気が上がる（20.7%）」，「穴の数は奇数がいい（67.5%）」などの噂を信じる人がかなりの割合を占めていた。今回の調査結果でも「Fac1.内面的高揚イメージ」で「未経験群」を含む3群間で有意差が見られなかったことを総合すると，今の若者にとってピアスは，外見の変化のみならず，「自信がつくと思う」，「新しい自分になれる気がする」といった自己の劇的な内面的変化が期待されているほか，「精神的な高まりが得られる」，「運勢が変わるなど，神秘的な力がある」といった運命操作的変化までも期待されており，このような傾向はピアス群と非ピアス群を問わず若者の間には広く普及している様子が窺われる。血液型占い，動物占い，星座占いなどの遊びじみた占い文化が蔓延している社会的風潮から若者は占いや運命操作的な事柄に親和的であり，ピアッシング行為にも同様の期待を込めているのではないかと思われる。

その一方で，「ピアスは不衛生だと思う」，「ピアスには，ふさわしくない場（面接な

ど）がある」などの「否定的外見イメージ」も第3因子として抽出されている。実際に医学界では，ピアス刺入部にリンパ球腫が出来たり（渡辺，1995；佐藤，2000），ピアス開穴部の埋入が生じたり（黒川，1990），耳朶にケロイドが出来たりする（利根，1990）などのトラブルが数多く報告されており，若者の安易なピアッシング行為に警鐘を鳴らしている。そして，今回の調査でもピアスの開穴方法に関する質問にピアス経験者の46.4%の人が安全ピンやピアッサーを用いて自分で穴を開けていたと報告しており，今回の調査対象者も先述した安易なピアッシングによるトラブルと同様のトラブルを経験している様子が窺われて，それがピアスによる肯定的な変化を期待しつつも否定的外見的イメージも持ち合わせている結果につながっていると思われる。

もう一つ興味深い知見は，第2因子に「Fac2.女性的イメージ」が抽出されたことである。スポーツ選手や芸能人のみならず一般大衆の中にもピアスをしている男性が増えている社会現象から，もはやピアスは男女共通のファッション道具であるという認識が定着してきているのではないかと想定された。ところが，今回の調査結果ではその予想に反して「男性のピアスは，女性に比べておしゃれの意味合いが薄い」，「男性のピアスは女々しいと思う」などといったピアッシング行為の性差の存在を意味する「女性的イメージ」がピアスには未だ根強く残っていることも興味深い結果であり，男性のピアッシング行為と女性のピアッシング行為には異なった動機やイメージが存在することが示唆された。

今回の調査対象は女子学生が殆どであり，男子学生においては上記に因子構造と異なった結果も予想される故，この点に関しては更なる検討が必要である。

3. 被検者のピアッシング実態とピアス・イメージとの関連について

「未経験群」，「平均群」，「過剰群」の3群に分けて検討したピアス・イメージでは，各群でピアスに関するイメージが異なっていた。

「未経験群」では，「Fac2.女性的イメージ」，「Fac3.否定的外見イメージ」，「Fac4.ファッション道具」のいずれの因子においても得点が最も低く，ピアスにまつわるこれらのイメージをあまり意識していないことが分かった。

一方で，「過剰群」は「Fac2.女性的イメージ」，「Fac4.ファッション道具」のイメージを最も強く持っているのに比べて，「Fac3.否定的外見イメージ」は相対的に低かった。ところが，「平均群」は，「Fac2.女性的イメージ」，「Fac4.ファッション道具」のイメージ得点が低い反面，「Fac3.否定的外見イメージ」の得点が3群の中で最も高かった。

以上の結果から，平均群と過剰群ではピアス・イメージに関する質的違いが存在しており，このようなピアス・イメージの質的違いはピアスのホール数の違いをもたらす鍵となり平均群の過剰ピアッシングの抑制要因となっていることが覗われる。

4. 自傷行為イメージについて

自傷行為イメージ尺度では，第1因子に「リストカットすることによって，ストレス発散が出来ると思う」，「身体を傷つけることによって高揚感が得られると思う」，「リストカットをすることによって自分の存在を確かめることが出来ると思う」などの「実存手段イメージ」が抽出された。近年，リストカットを含む自傷行為をする若者の急増が学校保健や医療の分野で相次いで報告される中（山口ら，2004；山口・松本，2005；川谷，2004），マスコミでも自傷行為の実態やその心理学的背景に関する多くの特集が組まれるようになった。その影響からか，多くの人が自傷者の存在を知るようになり，自傷者にとっての自傷行為は，生きていく上で必要な行為であるという認識も広まりつつあることが窺われる。

その一方で，「リストカットしている人は怖いと思う」，「リストカットは弱いものがすることだと思う」，「リストカットをする理由がわからない」，などの「Fac2.非共感」の因子も抽出されており，自傷行為者の存在やその心的背景に関する知識はあっても自傷行為には共感できないというイメージも存在しており，その受け止め方には葛藤が存在している様子も窺われる。

5. ピアッシングと自傷との関連について

本研究では，ピアス穴を自分で開けたか否かという開穴方法（自・他），そして繰り返し多くのピアス穴を開けるか否かの開穴数（平均群・過剰群）という2要因からピアッシングと自傷行為との関連性を検討した。その結果，自傷行為イメージの「非共感」では平均群が過剰群よりも有意に高い得点を示し，自傷者への理解の困難さと関わり否定，自傷行為と自分との無縁さ，自傷行為の無意味さなどを認識していた。すなわち，過剰群は平均群に比べて自傷行為への共感性が高い結果であり，過剰なピアッシング行為は自傷的意味を持つ可能性を示唆した。ところが，「ピアスを自傷だと感じる程度」というより直接的質問に関しては，過剰群が平均群より若干得点が高いものの，いずれの群も「2. あまりそう感じない」と回答しており，自傷行為との関連性は確認できなかった。

本研究では，過剰群のサンプル数が少なく，調査対象者のほとんどが女性であり，更に過剰群の操作的定義においても現在開いているピアス穴の数で行っている故，FeldmanやFavazzaが定義している軽度の自傷行為としてのピアッシング傾向を正確に反映した群ではない可能性も考えられることから，この点について考慮した更なる検討が必要である。

要　約

本研究は，日本の若者の「ピアッシング行為」と「自傷行為」に対するイメージを調べ

ると共に，ピアッシング行為と自傷との関連性について検討した。短期大学生を中心とした285名を対象（女性256名・男性28名・不明1名）に，「ピアッシング実態」，「ピアス・イメージ」「自傷行為イメージ」「ピアッシングを自傷行為だと感じる程度」に関する独自に作成した質問紙を実施した。ピアス・イメージでは「Fac.1内面的高揚」，「Fac.2女性的」，「Fac.3否定的外見」，「Fac.4ファッション道具」の4因子が抽出され，自傷行為イメージでは，「Fac.1実存手段」，「Fac.2非共感」の2因子が抽出された。ピアス・イメージにおいて，ピアス「過剰群」は「Fac.2女性的イメージ」，「Fac.4ファッション道具」のイメージを最も強く持っており，「Fac.3否定的外見イメージ」は相対的に低かったが，ピアス「平均群」は「Fac.2女性的イメージ」，「Fac.4ファッション道具」のイメージ得点が低い反面，「Fac.3否定的外見イメージ」の得点が最も高かった。平均群と過剰群におけるピアス・イメージの質的違いがピアスのホール数の違いをもたらす鍵となり，平均群の過剰ピアッシングの抑制要因となっていることが示唆された。ピアッシングと自傷との関連性においては，「ピアッシングを自傷行為だと感じる程度」というより直接的質問に関しては平均群と過剰群間の有意差は見られなかったが，自傷行為イメージの「Fac.2非共感」では過剰群が平均群よりも有意に低く，過剰群は有意に自傷行為に共感的である結果であった。この結果から過剰なピアッシング行為は自傷と親和的であることが示唆された。

引用・参考文献

阿部隆夫，竹谷一雄　1993「総合病院における手首自傷を伴う症例の臨床的検討」，精神医学，Vol.35，257-264.

Briere, J. and Gil, E., 1998 Self-mutilation in clinical and general population samples : Prevalence, correlates, and functions, Am J Orthopsychiatry, Vol.68, 609-620.

金子智栄子・桜井礼子　2004　女子大生のピアスに対する意識と人生観，文京学院大学研究紀要，Vol.6（1），111-120.

神山進　1996　被服心理学の動向　高木修（監）大坊郁夫・神山進（編）　被服と化粧の社会心理学，北大路諸邦.

苅田かなえ　2002　ニッポンのお子さま（第6回）「ボディピアス」，家庭フォーラム，Vol.10，44-47.

川谷大治　2004　精神科外来，「現代のエスプリ，川谷大治（編）」，29-40.

黒川正人　1990　「ピアス型イアリングの装着部の埋入の1例」，日美会報，Vol.12，97-101.

Favazza, A. R. 1989 Why patients mutilate themselves, Hosp Com Psychiatry, Vol.40, 137-145.

Favazza, A. R., and Rosenthal, R. J., 1993 Diagnostic issues in self-mutilation, Hosp Com Psychiatry, Vol.44, 134-140.

Favazza, A. R. 1998 The coming the age of self-mutilation, J Nerv Ment Dis, Vol.186, 259-268.

Favazza, A. R. 1999 Self-mutilation, Jacobs D. G.(ed), The Harvard Medical School Guide to Suicide Assessment and Intervention, Harvard Press, Boston, 125-145.

村澤博人 2002 ピアスの時代，化粧文化，Vol.42，78-81.

Feldman M. D. 1988 The challenge of self mutilation : A review. Compr Psychiatry, Vol.29, 252-269.

Howton, K., Rodham, K., Evans, E., et al. 2002 Deliberate self harm in adolescents : Self report survey in schools in England, Br Med J, Vol.325, 1207-1211.

柏田勤 1988 Wrist Cutting Syndromeのイメージ論的考察－23症例の動機を構成する3要因の検討－，精神神経学雑誌，Vol.90，469-496.

西園昌久，安岡誉 1979 手首自傷症候群，臨床精神医学，Vol.8，1309-1315.

小田晋 2000 「リストカット手首を切る少女達」，二見書房.

岡田斉 2002 自傷行為に関する質問紙作成の試み，「人間科学研究」（文教大学仁賢科学部紀要），Vol.24，79-95.

岡田斉 2003 自傷行為に関する質問紙作成の試みⅡ：自傷行為を引き起こす要因についての検討，「人間科学研究」（文教大学仁賢科学部紀要），Vol.25，25-31.

左藤志郎 2000「ピアス刺入部に生じたリンパ球腫」，整形外科，Vol.43，151-154.

Simeon, D., and Favazza, A. R. 2001 Self-injurious behaviors : Phenomenology and assessment, Simeon, D., and Hollander, E.(ed.), Self-injurious behaviors. American Psychiatric Publishing, Inc., London, 1-28.

田中優 2000 自尊心と被服行動：身体像，身体カセクシス，及び，被服行動が自尊心におよぼす影響課程モデルの提案，大妻女子大学人間関係学部紀要，Vol.1，69-76.

利根川均 1990 「ピアス型イアリングの装着後にみられた耳垂型ケロイドの治療経験」，日美会報，Vol.12，102-106.

渡辺雅子 1995 「ear piercingによるgranuloma」，皮膚診療，Vol.17，1041-1044.

安岡誉 1978 Wrist Cutting Syndrome，季刊精神療法，Vol.4，188-191.

山口亜希子，松本俊彦，近藤智津恵，小田原俊成，竹内直樹，小阪憲司，澤田元 2004 大学生における自傷行為の経験率，精神医学，Vol.46（5），473-479.

山口亜希子，松本俊彦 2005 女子高生における自傷行為，精神医学，Vol.47（5），515-522.

きむ えきょん（心理学）